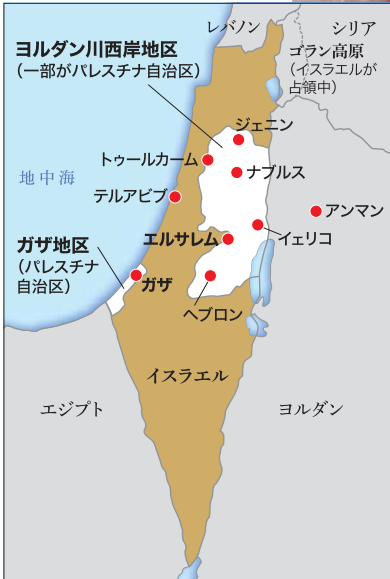


パレスチナーイスラエル情勢の今

緊急支援で配布した食用ウサギを受け取った女性たちと、パルシクのガザスタッフ(左端)



2014年7月初頭に始まった51日戦争の停戦が成立して約2年が経ちました。しかし、フランスが主導しようとしている中東和平交渉の再開はイスラエルの拒絶にあい遅々として進んでいません。

ガザ地区では、国境沿いを中心にイスラエル軍による住民への発砲、ガザからのロケット弾とイスラエルによる空爆の応酬が今も散発的に続いています。今年5月初めにも、イスラエルによる封鎖にあえぐガザに物資を違法に輸入するトンネルが掘られたという疑いで、イスラエル軍がガザ地区内に越境したことを契機に緊張が高まり、子どもを含む市民が巻き込まれて犠牲になりました。西岸地区では、2015年9月以降イスラエル兵とパレスチナ市民の衝突が相次ぎました。兵士たちを「襲撃した」とされる少女少女が重傷を負ったまま路上に長時間放置されたり、無抵抗の青年の頭を兵士が狙撃するなど衝撃的で痛ましい映像も公開され、批判を呼びました。また今年4月までに東エルサレムなどでパレスチナ600世帯が土地を収用され、強制立ち退きを強いられています。

一方で、イスラエルを取り囲む状況にも動きが見えます。昨年11月、EUがイスラエルからの輸入品のうち、パレスチナに違法に建設した入植地で生産された商品にラベルを付けることを義務化しました。世界各国の大学や学生組織もイスラエル製品や支援企業製品の不買運動を支持するなど、これまで以上の広がりを見せ、注目を集めています。

パルシクは今年からガザに加えて、西岸でも事業を開始しました。皆さまからのご支援をお願いします。

目次	パレスチナ	イスラエル情勢の今…… 1	スリランカ	有機転換茶畑が有機JAS認証取得…… 7
	パレスチナ	食用ウサギの配布で女性たちの生計を支援、西岸地区でも事業始動!…… 2	宮城県石巻市	「情報交流館北上館」オープン…… 7
	トルコ	シリア難民 出口の見えない日々、ハラン市 ニーズに合った支援を…… 3	フェアトレード/パルシクからのお知らせ…… 8	
	東ティモール	女性グループのネットワーク化に向けて、協働作業で進める水事業…… 4		リキッドコーヒーリニューアル、紅茶イベント、ご支援のお願い
	東ティモール	2015年豆、出荷、東ティモールフェスタ…… 5		
	マレーシア	女性がエンパワーされる漁村になる試み…… 5		
	スリランカ	サリー事業コロポ視察、ジャフナ県・ムライティブ県での養殖…… 6		

■食用ウサギの配布で女性たちの生計を支援

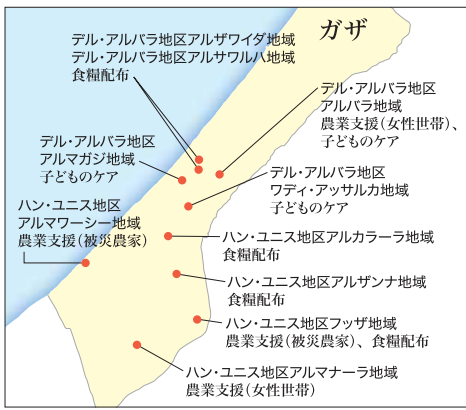
■支援規模と地域を拡大

昨年3月から緊急支援として始めた、被災した小規模農家への農機具・苗の配布および女性世帯への食用動物配布、貧困世帯への食糧配布、トラウマを抱えた子どものケア事業は、今年の3月まで規模と地域を拡大して継続してきました。

■ウサギ飼育セットを配布

女性世帯の支援では、当初は、飼育の簡単な鶏の配布を検討していましたが、昨年6月からガザで猛威を振るっていた鳥インフルエンザが収まらず、急速ウサギ飼育セットに切り替えての配布となりました。配布後、ウサギが盗まれるといったトラブルもありました（無事戻ってきました）が、現在ではそれぞれの世帯で少しずつ生産が軌道に乗ってきました。4世帯が自主的に共同生産・販売グループを作るなど、女性たち自身も積極的に取り組んでいます。

裨益者の一人、マリyam・サルハンさんは毎日夜明



右：女性世帯へウサギを配布
左：ウサギを大事そうに抱きしめるマリyamさん

け前に起きだし、ウサギの状態をチェックするのが日課です。その後、家事のかたわら、ウサギの世話や掃除をこなします。マリyamさんは13人家族ですが、家には洗濯機がないため、3時間かけて手洗いで洗濯をしています。57歳の彼女にとっては重労働ですが、ウサギの飼育を始めてからは新たな目標ができました。「ウサギを売ったお金を貯めて洗濯機を買うの。そうすれば時間も手間も節約できる。もっとウサギの世話に集中できるでしょ」と期待に胸を膨らませています。

■一歩先の復興を見据えて

今年の4月からはガザの復興、そしてその先の経済発展を後押しするため、より大きな農業インフラの再建や中長期的な復興を見据えた新しい支援を始めました。資材の輸入規制により進んでいなかった小規模農家の農業用温室の再建に、代替資材を用いて取り組みます。また女性世帯への食用動物配布を通じた生計支援を更に拡大するとともに、高い飼料コストを抑える

ため、女性たちのグループでの飼料生産にも取り組んでいきます。トラウマを抱える子どもの心理社会的ケアでは、地域の中でケアを継続していく体制の構築を目指し、地域の市民団体のスタッフにケア技術の研究を実施します。また家庭を含めた包括的なケアを行えるよう保護者への支援を強化していきます。（盛田）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と、皆さまからのご寄付で実施しています。）

■西岸地区でも事業始動！

2016年度はガザ事業に加え、西岸地区でも事業を開始することになりました。テーマは循環型社会づくりです。北部ナブルス県ジャマイン町で、地元の女性組合の菜園と2つの中学校の畑を舞台に、生ごみを再利用した有機堆肥づくりに取り組みます。

パレスチナにおいてゴミの処理は大きな問題です。日本では分別される燃えるゴミも燃えないゴミも、ビンや缶の資源ゴミまで一緒の袋で捨てられます。さらにジャマインでは、ゴミが本来運ばれるべき隣のゴミ処理場ではなく、オリーブ畑のそばにある空地に集積されています。

事業では、生ごみの再利用を通して、地域のゴミの減量と人びとの環境意識の醸成を目指します。また、作った堆肥は、女性組合が学校で販売している調理パンの材料となるハーブの栽培に利用し、生産量の拡大を目指すとともに、地域における資源の循環を生み出します。有機堆肥づくりに当たっては、



循環型社会のモデルとして有名な山形県長井市のレインボープランから講師を招く予定です。（廣本）

（この事業は、地球環境基金の助成と、皆さまからのご寄付で実施しています。）

ゴミの集積場となっている空地。すぐ傍にはオリーブの木も見える

シリア難民 出口の見えない日々

シリア紛争は5年目を迎えたものの、未だ解決の糸口さえ見えません。ロシア軍やアサド政権による攻撃が激化するなか、周辺国にて難民登録されたシリア人は420万人を越え、うち最大数の難民を抱えるトルコでは約300万人が生活しています。2016年1月、トルコ政府は同国内に滞在するシリア難民に対し労働許可証を与え、トルコの最低賃金が得られるよう、新しい条例を施行しました。しかし、それまでシリア人に対し、低賃金で長時間労働を強いることができたトルコ人雇用の多くはこれを無視し、またシリア人も職を失うことを恐れ、その権利を主張できず、生活改善へと繋がりにくいのが現状です。

ヨーロッパ諸国は3億ユーロをトルコ政府のシリア難民政策に支出することに合意しましたが、これによりギリシャへと渡ったシリア難民はトルコに強制的に送還されることとなり、トルコで生活するシリア人は出口の見えない日々を送らざるを得ない状況となっています。



アパートを借りようとする家賃が高すぎるため、大家と交渉をして未完成のアパートに住まわせてもらうシリア人も多くいる。このアパートには約20世帯が住んでいる。

ハラン市 ニーズに合った支援を



■冬の厳しい寒さの中で
2015年10月よりトルコ南部シヤンルウルフア県ハラン市にてシリア難民支援を開始し、トルコのイスタンブールに本部を置くSupport to Life (サポート・トゥ・ライフ) をパートナー団体とし、食糧及び衛生品の配給と、越冬に必要な生活用品(毛布・冬服・ヒーター・マットレス)の配布を2016年3月まで行いました。

■駐在した当初は、夏に50度近くまで気温が上がると、冬も暖かいのだろうと想像していましたが、12月下旬からは気温が零度まで下がり、水道管の水が凍結して午前中は水が出ないことがあったり、雪も数回降ったりと、東京の冬と似た天候でした。ハラン市ではシリア難民世帯の20%がテント暮らしをしています。シヤンルウルフア市内にある事務所で、冬に水が出なかったり、停電になったりした時には、事務所内ですらとても寒く、電気のない暮らしはとても不便を感じますが、テント暮らしの難民の人びとの暮らしは更に大変です。

■第2期目、食糧支援の継続

2016年4月からトルコでの支援活動の第2期目をスタートし、引き続きハラン市で食糧支援を行っています。また、今期はトルコ南部のガジアンテップ市に本部を置くWatan(ワタン)を新たなパートナー団体として、シヤンルウルフア市の郊外の村で暮らす、

まだ支援が行き届いていないシリア難民世帯に対しても食糧支援を行っていく予定です。

食糧支援では、バ



1月の雪が降った晩の翌日に行われた食糧配布

ウチャーというプリペイドカードのようなものを1世帯に1枚配布し(合計239世帯1290人)、そのカードに1人50リラ(約2000円)分を毎月入金します。そのカードを使って契約した商店で食糧が購入できます。毎月入金日には、多くの世帯が家族揃って商店で買い物をしている姿が見られました。

事前調査では、多くが炭水化物中心の食事で、野菜、果物、肉は高価なためにほとんど食べられていないことが分かりました。バウチャー配布後に毎月の購入品を分析してみると、ほとんどの世帯が野菜を購入できていることが分かりました。また、たいいていの世帯が紅茶と砂糖を購入していました。シリアで生活をしてきた時のように、トルコでも変わらず、シリア人が愛飲する甘い紅茶を日常的に飲んで生活していることが伺えます。

ハラン市郊外の村々ではバウチャーを利用できる商店がないため、食糧バスケットを2479世帯(13386人)に配布しました。常に活動地域のニーズと状況にあった支援が出来るよう努力をしています。

(大野木)

(この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と、皆さまからのご寄付で実施しています。)

■2015年豆、出荷しました！

■二次加工場での初めてのコーヒー豆加工
2015年の8月27日にオープンした
パルシック自前のコーヒー二次加工場で
初めて加工したコーヒー豆を、2016
年2月初旬、日本へ向けて出荷しました。
コカマウに加入する18の集落の中から、
標高が比較的高い6つの集落を選んで、
集落別にロット分けをしました。これま
でも、集落ごとの特徴を引き出すために
集落別の出荷を試みたことはありまし
たが、時間と手間がかかる作業に委託先
の工場のスケジューリングを押さえること
ができませんでした。



オープンした二次加工場で、コーヒー豆の計量チェックをする工場長のネルソン

■集落別の飲み比べで新たな発見
集落別にコーヒーを飲み比べてみると、

コカマウの中にもいろいろな特徴がある
ことがわかります。標高や土壌、気候と
いった環境による違いから、コーヒーの
木の樹齢、手入れ具合といった畑の違い、
収穫後の加工の仕方でもコーヒーの味に影
響します。それぞれの集落で、生産者の
みなさんがどんなふうに関心を栽培、
加工しているのか、消費者のみなさんに
も想像しながら飲み比べていただけたら
と思います。

■さらなる品質向上を目指して

新加工場では比重選別機で欠陥のある
豆を選り分けてくれるため、加工の最終
段階、女性たちによる手選別に大きな労
力を払わずとも、良い状態でコーヒーを
出荷することができそうです。この設備をも
っと多くのコーヒー生産者組合のために
活用したいと考え、各地の生産者組合を
訪ねて調査を開始しました。

東ティモールでは、組合として組織さ
れていないコーヒー生産者のほうが圧倒
的に多いのが現状ですが、新加工場から
各組合の多様なコーヒーを多様な市場に
届けることで、コーヒー生産者組合の組
織化、ひいては生産者たちの経済的自立
につなげていきたいと思っています。

(伊藤 淳子)

■東ティモール・フェスタ2016開催

5月21日(土)、上智大学四谷キャン
パスにて、東ティモール・フェスタ20
16が開催されました。フェアトレード、
教育、保健、国際協力等の分野で東ティ
モールへの支援を実施している団体や教
育機関が実行委員会を組織し、東ティモ
ール大使館、JICA、清泉女子大学の
後援を受け、初年度はパルシックが事務
局を務めました。

当日は20ほどの出展ブースのほか、東
ティモールの食事とお菓子、3つの産地
の東ティモールコーヒーが味わえるブー

ス、写真家の佐藤
慧さんの写真展な
どでにぎわいまし
た。トークステー

ジではNGOや教育機関からの最新情報
やワークショップが開催され、ステージ
前の席は満席となり、みなさんとても熱
心に話を聞かれている姿が印象的でした。

会場には東ティモールファンや、まだ
見ぬ東ティモールの情報に興味を寄せる
来場者であふれていました。(中村 由紀)



オープニングでの留学生の歌

■女性がエンパワーされる漁村になる試み

PIFWANITA^{※2}の結成から3年目
を迎え、女性たちが自ら考えて活動を発
展させられるかが鍵になります。マンダ
ンで販売され、地方紙に取り上げられ
女性たちは他の村に講師として招かれる
ようになりました。マレー人女性同士が
交流し、製品を通じて、環境問題、栄養
や健康問題について話し合う機会が生ま
れました。しかし、女性たちはこれまで
自律的に製品管理や販売計画を作った経
験がないので、例えばパッケージなどの
問題が解決できずに放置されがちになり

(このフェスタは、花王株式会社及び花王ハートポケ
ット倶楽部の助成と、皆さまのご寄付で実施しました。)



現状のPIFWANITAの問題点、
将来への展望について話し合い

ます。問題に立ち
向かい、女性たち
自身がエンパワーさ
れながらPIFW
A^{※1}と共に活動を継
続することを通じて、小さな漁村のマレ
ー系(ムスリム)の女性たちが自立し、そ
して女性たちの家族が健康的な食生活を
送れるよう支えていきます。(大塚 照代)

※1 PIFWANAはペナン沿岸漁民福利協会:
Penang Inshore Fishermen Welfare Association.
※2 PIFWANITAはその女性グループ。
(味の素「食と健康」国際協力支援プログラムの助成と、
皆さまのご寄付で実施しています。)

■サリー事業 女性たちのコロナボ視察実施

スリランカ北部の女性たちが、南部の女性たちからご寄付いただいた古着サリーをバッグや衣類にリメイクする、サリー・リサイクル事業はこの4月に2年目に入りました。

■視察を通じて広がる女性たちの夢

2016年前半は、コロナボをはじめとした都市での営業に力を入れ、新たに商品を置いてくれる店やゲストハウスが増えました。毎週土曜日にコロナボで開催されるイベント「グッドマーケット」での販売も継続しています。

4月に、特に活動に積極的な18名の女性メンバーを対象として、コロナボを訪問するツアーを実施しました。ツアーの目的は、外国人観光客向けの商品の色使いと品質を知ること。老舗の土産物店や、高価格帯のセレクトショップを訪ねて、店内の見学をしました。お店のスタッフの方々も商品の背景やお客さんからの反応をととても丁寧に説明してください、女性たちにとっては新鮮な体験となりました。斬新なデザインのドレスや、カラフルな

■ジャフナ養殖事業

ジャフナ県での養殖事業は、残り4か月ほどとなりました。海藻養殖では、昨年の経験をふまえて今年にはモンスーンの季節を前に海藻にネットをかけて、海藻

雑貨など、普段のジ

ャフナ、ムライティ

ブの生活では決して

目にしない商品ばか

りでしたが、皆とて

も気に入って、次は

あんな商品を作っ

てみたい、と新たな夢

も広がりました。縫

製の質の違いも実感

し、高く売るためにはも

っと丁寧な縫製

が必要だ、ということも

実感。村に帰っ

て来てから、今回参加で

きななかった他の

メンバーに見たことを

生き生きと伝える

女性たちの姿が印象に

残っています。

■営業と商品開発の

強化

5月には、イギリスと

日本から、経験の

●Facebookでの応援もよろしくお願いたします。www.facebook.com/SariConnection (この事業は、JICA草の根技術協力事業の助成と、皆さまからのご寄付で実施しています。)

コロナボのお店で店員さんの説明を聞く女性たち



■ムライティブ県で魚の放流養殖

2013年9月から実施しているムライティブ県でのコミュニティ復興事業が3年目を迎えています。今年は、ムライティブ県での養殖の導入にも取り組んでいます。



■さまざまな困難、事業地の変更

養殖事業の一環として、淡水魚テイラピアの放流養殖を実施しています。稚魚を池に放流して数か月後に漁獲し、その収入の一部を漁協に貯蓄して、今後の稚魚放流を漁協自ら継続的に行うのが目標です。

事業を開始した後、当初計画していなかった内陸部のマダワラシガム村からスリランカ政府養殖開発庁に放流養殖への強い要望が上がりました。同村は経済的に困難な状況が続いていたことから、放流養殖の実施を決めました。稚魚の発注後、到着が大幅に遅れるというハプニングもありましたが、5月中旬に無事に暗闇の中で一部を放流しました。マダワ

ラシガム村の漁協と共に漁獲できる日を楽しみに、貯蓄体制の構築を進めています。

他方、テイラピアの放流候補の1つだった、チェマライ村ペリヤラム池で、稚魚放流に向けて漁協と調整を始めたところ、池近くのヒンズー教寺院が放流養殖で得た収入の1/3を分配するように主張し始めました。チェマライ村のほとんどがヒンズー教徒であり、ヒンズー寺院の要求が理不尽な内容であっても反論はできません。また、シンハラ人による違法漁業をめぐり、ペリヤラム池のほとりに駐屯するスリランカ海軍とチェマライ漁協との関係が悪化。魚の放流をした場合、漁獲をめぐって更に関係が悪化する懸念が生じたため、チェマライ村漁協から放流養殖の要望が取り下げられました。現場は計画どおりに進まないことも起こると実感する日々です。

(飯田彰)

(この事業は、日本NGO連携無償資金協力の助成と、皆さまからのご寄付で実施しています。)



暗闇の中で行った、マダワラシガム池での稚魚放流作業

■有機転換茶畑が有機JAS認証取得！

■まずは39圃場が取得

デニヤヤでは2011年に小規模農家の紅茶生産者グループ・エクサの有機転換支援を開始し、その後2013年からエクサの圃場に対して有機転換の検査を受けてきました。今年の1月に4回目の検査を受け、ついに有機JAS認証を得られました。今年の検査で「有機」と認証されたのは39圃場です。現在、エクサのメンバーの全圃場数は106ですので、今年は認証を受けられない圃場も、来年以降に順次認証を受けられるように準備しています。

■認証に必要な栽培記録のトレーニング
有機認証の検査で、圃場の視察とともにとても重要なのが有機栽培の記録です。



有機栽培記録のチェックを受けているウイジャセーナさんの奥さん(左)とスタッフのサンバット(右)

エクサのメンバーは各自がこの圃場記録をつけることになっています。2011年に有機転換を開始した当初は、スタッフが圃場を視察する際にメンバーの代わりに書いていました。しかし、メンバーは全員読み書きができること、スタッフによる視察だけでは日々の細かな農作業を記録しきれないことから、メンバー自身に書いてもらうようになりました。日々の記録をつけることに慣れていない紅茶農家にとって、継続して記録できるようになるまで時間がかかりましたが、昨年の後半頃からようやくメンバー全員が自身で記録できるようになりました。

記録は農作業計画をたてる際にも活用されています。

■有機認証取得で広がる販売先

これまでパルシックはエクサが出荷する有機転換中の茶葉の販売価格に対して補助をしてきました。したがって、有機認証を受けたことで、大幅に茶葉の価格が上がることはありません。しかし、メンバーは茶葉以外のスパイスなども有機農産物として輸出ができるようになり、収入源の多角化をより進められると期待しています。

(高橋 知里)

(この事業は、ゆうちょ財団および日本国際協力財団の助成と、皆さまからのご寄付で実施しています。)

■「石巻市情報交流館北上館」オープン、郷土料理にふれる

■北上の郷土料理

「とりわけ(とりまわし)料理」

石巻市北上町の復興情報を発信し、かつ、地域の人が団らんで集える場として、2016年3月に建設された石巻市情報交流館北上館。3月8日のオープニングに、来賓の方々に北上の郷土料理「とりわけ(とりまわし)料理」を味わってもらい、北上の文化や食材の豊かさを知ってもらいたいとの意見が上がり、それを実行できるように、復興応援隊として運営に関わらせてもらうことになりました。個人的にも以前からとりわけ料理に興味を持っており、楽しんで取り組みました。

■こだわりのある郷土料理でもてなし

郷土料理作りは、以前に北上の食文化の調査をした際に中心的存在だった地元の方を通じて、その周りの主婦の方、地



オープニング当日、料理にくぎづけの来賓と取材陣
この日振る舞われた料理の数々

元の敬老会の婦人部の方たちに協力を仰ぎ、全面的にお手伝いをしていただきました。幸い、婦人部の方たちが住む地区は建物への震災の被害が少なく、公民館で使用していたお椀や小皿、大皿が残っていました。とりわけ料理は、大皿で出てきた料理を好きな物を好きな量だけ取って食べる形式なので、料理だけでなく食器にもこだわりのあることを知りました。当日は総勢10名ほどで、皆さんテキパキと調理をこなしていました。この日のメニューは、つきたてのお餅とハゼの出汁で作った雑煮やあんこ餅、さらにはツールド東北で好評のアワビ入りの北上茶わん蒸し、手作りの漬物の盛り合わせなど。紹介しきれないほどの種類の料理でもてなしをしました。召し上がった皆さんは、お腹も心も大変満足しておられました。

これを機に、つながりが出来た地元のお母さん方と、今後も関わり続けながら、北上の伝統を繋いでいくお手伝いができたらと思っています。

(復興応援隊 成田 昌子)

(復興応援隊事業は、宮城県から受託して実施しています。)

フェアトレード／パルシックからのお知らせ

東ティモール産 有機栽培コーヒー カフェ・ティモール リキッドタイプ

ますます
美味しくなりました！



簡単に本格的なアイスコーヒーが飲めると人気のカフェ・ティモール「リキッドタイプ」が、この度リニューアルいたしました。より鮮度の高いコーヒーをお届けできるよう、今までより少量の製造に切り替えました。新しく製造をしてくださる京都飲料株式会社さんを4月に訪問しました。

コーヒーの淹れ方は「ネルドリップ方式」。300リットル分のコーヒーをいくつかのステンレスドリッパーに分けてネルを張って、丁寧に抽出します。量は違えど、その淹れ方は、ハンドドリップそのもの！これが、雑味のないすっきりとした美味しいコーヒーができる秘密です。

向夏の折、より美味しくなったリキッドコーヒーで涼を取りませんか。6本入りのセットもございます。贈り物にもお勧めです。
(ロバーツ 圭子)



ネルドリップの様子。京都飲料の工場にて

京都飲料の社長(左)と常務(右)のお二人

ちよつと寄り道♪ フェアトレードな お店

Fair Trade & Organics @MARE

〒249-0007 神奈川県逗子市新宿1-4-30

email : amarefto@gmail.com

tel&fax 046-872-6277

http://amarefto.com/



逗子の海岸沿いに店を構える「Fair Trade & Organics @MARE (アマーレ)」さん。逗子市はフェアトレードタウン化を目指し、2016年4月には市長による「逗子市フェアトレードタウン宣言」が出されました。アマーレさんは、フェアトレード食品、衣類、雑貨の販売にとどまらず、映画の上映会やお話会などのイベント開催、地域の情報の紹介などもされ、タウン運動盛り上げの大きな要となっています。逗子海岸が一望できるテラスや店内で、パルシックとの出逢いから生まれた「逗子珈琲」が飲み、地産地の無農薬野菜や伝統食材を使ったヴィーガン(完全菜食)の美味しい食事がいただけます。お散歩の寄り道に、海を見ながら、ほっと一息つきに、ぜひお訪ね下さい♪

3月19日、スリランカ デニヤヤ 紅茶事業の報告会を行いました

広報



試飲を通じた産地当てクイズで
来場者と話が盛り上がる高橋

3月19日(土)、東京事務所近くの「ワテラスホール」にて、デニヤヤ事業の報告会を開催しました。事業担当の高橋知里が帰国し、スリランカ紅茶専門店ミツティーの中永美津代さんをお招きして「おいしい紅茶の探索研究 ～飲む・食べる・しゃべる～」と題したこのイベントは、おいしい紅茶の淹れ方講座、5種類の紅茶の試飲と産地当てクイズ、事業報告と内容が盛りだくさん。予約は早々に定員に達し、会場は紅茶好きの女性を中心に、大いに盛り上がりました。紅茶愛好家のみなさんにも、スリランカ南部での取り組みを知っていただくよききっかけとなりました。(中村 由紀)

会員になってパルシックを支えてください

皆さまのご支援によって支えられています

パルシックの活動に共感し、継続的に活動に参加していただける会員・賛助会員を募集しています。年2回のニュースレターや活動報告書・計画書の送付、活動報告会やイベントのご案内などを差し上げるほか、会員メーリングリストにご参加いただけます。

みなさまのご支援によって支えられています。
パルシックの活動へのご寄付を随時受け付けております。

会費/会員(個人) 10,000円 賛助会員(団体) 20,000円

●郵便局からの寄付 郵便振替口座：00140-8-536957

口座名：パルシック

●銀行からの寄付 三井住友銀行 神田支店(普) 2384136

口座名義：特定非営利活動法人パルシック

※銀行からお振り込みの際は、ご住所とお名前をご一報ください。

民際協力ニュース VOL.28 2016年6月

PARCIC

特定非営利活動法人 **パルシック**

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1-7-11 東洋ビル1F

電話：03-3253-8990 Fax：03-6206-8906

メール：office@parcic.org Web：http://www.parcic.org

オンラインショップ ParMarche (パルマルシェ)
http://parmarche.com

twitter
東京事務所：http://twitter.com/parcic_office

facebook
http://www.facebook.com/parcic